愛媛県美術館研究紀要　第17号抜刷（2019年３月11日発行）

高橋周桑　人と作品

長　井　　健

高橋周桑　人と作品

長井　健

はじめに

高橋周桑（一九〇〇～六四）は、愛媛県西条市出身の日本画家である。速水御舟（一八九四～一九三五）の数少ない内弟子として、戦前は院展で活動し、さらに戦後は新しい日本画創作を目指して、山本丘人らと美術団体「創造美術」結成に携わるなど、本県出身の日本画家としては重要な足跡を残しているが、本格的な回顧展は、没後二十年の昭和五十九年（一九八四）に開催した愛媛県立美術館分館での展示のみであり、また没後五十年を経た現在、残念ながらその画業や作品を語る機会は少なくなっている。

そのような中、当館では昨年（平成二十九年）度、ご遺族より計十五点の作品を寄贈いただき、収蔵作品が格段に増えることとなった。さらにここ数年で、個人所蔵者からの寄託品も二十数点が加わり、当館において周桑の画業についてある程度展望できる環境が整ったと言える。この好機に、改めて周桑の画業についてまとめておく次第である。加えて、当館所蔵および寄託の周桑作品についても紹介したい。

生涯と画業

（1）出生～御舟入門

周桑は、明治三十三年（一九〇〇）十二月二十三日、本県周桑郡庄内村大字旦ノ上（現・西条市）に、代々庄屋を務める高橋家の七人兄弟の六番目の子として生まれる。本名は千恵松。明治四十二年（一九一二）、父と長兄が事業に失敗、家族で九州に移住し、此地で少年時代を過ごす。一家の働き手として、炭坑や陶石採掘、旅館の番頭、菜園の手伝いなどに従事したという。大正七年（一九一八）、十八歳の時に、『萬朝報』に掲載された速水御舟の《洛北修学院村》（現・滋賀県立近代美術館蔵）の展評を読み、さらに画集を見て感銘を受け、画家を志すようになる。同十年（一九二一）、御舟に何度も入門希望の手紙を出すものの、この時自身も二十七歳という若さであり、自らの制作に専念したいことから、弟子を取らない主義だった御舟はその都度断る。同年末に上京した周桑は、新聞販売の職そして下宿先を周到に決めてから、御舟を訪ねて直談判し、その熱意に根負けした御舟は、ついに入門を許された。もっとも御舟は、周桑を弟子としてではなく、一緒に研究する仲間として迎え入れた。「周桑」の号は、出身地に因んで御舟から与えられたものである。当時、御舟は結婚直後で、目黒の大地主で芸術支援家であった義兄の吉田幸三郎宅に住んでいたが、周桑は一人で画室の世話をするなど、常に傍らにあって、厳格で親密な師弟関係を築いていった。周桑はこの関係を「それは親鶏が雛に餌を口移しにやるやうな実に慈愛に満ちたものでした」（『美術評論』四―二、昭和十年四月）と述懐している。同十二年（一九二三）、御舟とともに、武蔵野野火止（現・埼玉県新座市）の臨済宗妙心寺派の古刹・平林寺に仮寓し、絵画修行と参禅に励んだ。『萬葉集古義』などの古典にも親しんだという。以後、昭和十年（一九三五）に御舟が亡くなるまでの十九年間、周桑は師を支え続けた。

御舟没後には、義兄・吉田幸三郎が遺品の整理・管理するのを助け、大いに頼りにされた。

（2）昭和戦前期

昭和三年（一九二八）、再興第一五回院展に《春閑》で初入選を果たし、さらに同五年（一九三〇）の再興第一七回院展では《秋草》を出品、太田聴雨とともに院賞を受賞、院友となった。同七年（一九三二）、再興第十九回院展に《銀座（1）（2）（3）》を出品。同年に郷倉千靭門下の豊島志ま子と結婚し、平林寺近くの埼玉県北足立郡片山村堀之内（現・新座市）に居を構えたが、翌年には東京都目黒区三谷町に転居した。同九年（一九三四）、日本橋髙島屋で第一回個展を開催。再興第二十一回院展に《競馬》を出品。さらに、奥村土牛、吉岡堅二、溝上（小倉）遊亀、太田聴雨、寺島紫明らと関尚美堂主催の「九皐会」同人となる（のちには上村松篁、徳岡神泉、山口華楊も参加）。同一〇年（一九三五）に師の御舟が享年四〇歳で逝去、以後は師に就くことはなかった。同十五年（一九四〇）、橋本明治、加藤栄三、吉岡堅二、山本丘人、福田豊四郎らとともに第一回「丹光会」を開催、同年、目黒区鷹番に転居。同十六年（一九四一）、再興第二十八回院展に《鶴》を出品。この頃より、京都、奈良を訪ねる。同十八年（一九四三）、文楽の吉田栄三に心酔、新橋演舞場に毎日通う。同年の第三十回再興院展に《文楽吉田栄三（義経千本桜）》を出品。また同じ頃、文楽を撮影していた写真家・土門拳とも親交を結んだ。

（3）戦後

昭和二十二年（一九四七）、再興第三十二回院展に《陳列室（須菩提）》を出品して無鑑査となったが、翌年、四十八歳の時に院展を離れて、東京の山本丘人、吉岡堅二、福田豊四郎、橋本明治、加藤栄三、そして京都の上村松篁、奥村厚一、菊池隆志、向井久万、秋野不矩、沢広靭、広田多津らとともに「世界性に立脚する日本絵画の創造を期す」ことを綱領とし、「在野精神に立脚し官展に関与せず」を規約とする新たな美術団体「創造美術」を創立した。第一回創造美術展に《白亜夜景》《室内仏》《ダリア》を出品。同二十六年（一九五一）、創造美術は新制作派協会と合流して新制作協会日本画部（現・創画会）となり、会員として活動。以降、同三十六年（一九六一）まで毎年、新制作協会展に出品を続ける。同二十九年（一九五四）、日本橋髙島屋、大阪梅田画廊で個展開催。以後も、同三十六年（一九六一）までに三度個展を開催した。この時期は、御舟作品のコレクターであった演出家・武智鉄二（一九一二～八八）と出会い、互いに芸術論を夜通し戦わせて親交を深めた。この縁で、周桑は、武智演出による舞台の舞台衣装と舞台美術を、昭和二十九年（一九五四）、三十一年（一九五六）に担当した。同三十三年（一九五八）、妻・志ま子が逝去、自身も胸を病む。同三十五年（一九六〇）には、同じ愛媛出身で新制作協会洋画部にいた古茂田守介（一九一八～六〇）と、松山において二人展の開催を計画していたが、この年に守介が亡くなり実現しなかった。同三十八年（一九六三）、病状が悪化し入院、翌年二月二十七日に享年六十三歳で逝去した。同年、新制作協会日本画部春季展に絶筆《春暁》《林》《鉄仙花》を遺作出品した。

当館所蔵・寄託の周桑作品

当館が現在所蔵している周桑作品は、計二十一点（表1）。そのうち、十五点は、昨年（平成二十九年）度に、ご遺族より寄贈を受けたものである。これらは、周桑自身が生前手放すことなく手許に大切に置いておいた作品ということもあり、新制作協会展出品作二点や絶筆を含む優品ばかりである。さらに、ここ数年で、県内の個人所蔵作品の寄託も計二十三点（表2）を受け入れており、これらもあわせると、周桑その人の表現の個性や展開を、相応に展望し、理解しうる内容となっている。

師・御舟の影響がよく認められる、繊細で透徹した描写力が冴える《冬木立》

（№1、図1）《牡丹》（№22、図2）《夕月》（№24、図3）といった昭和戦前期の作品は、他に現存するものが少ないだけに重要である。多くを占めているのは、一九五〇年代以降の円熟期の作品であるが、御舟没後に院展を離れて、創造美術そして新制作協会での活動の中で、新たな画風の模索・展開へと至ったことが、戦前期の作品と比較するとよく分かる。これらはいずれも、丹念な写生に基づきながらも、自然をすっきりと整理し、自己の内面で再構成して画面に定着させている。中でも《山》（№8、図4）《梅》（№14、図5）《濠の月》（№15、図6）などに顕著な、抽象的な象徴性を帯びた表現は、あまりに偉大な師・御舟の存在に苦悩したという彼が、それを乗り越えて到達した独自のものと言えよう。晩年のインタビューで周桑は「日本画は古いなんてよくいわれるが、どぎつい原色を塗りたくった絵が多い今日、夢みたいな絵があってもいいじゃないか。もちろん基礎がしっかりしてなければいけないが」と語っている。「夢みたいな絵」とは、言い換えるなら「純化された幽玄な表現」とでもなろうか。また、昭和二十三年（一九四八）の第一回創造美術展の審査の様子を取材した土門拳が語るところによると、当時美術界を席巻しつつあった抽象主義の傾向を、会として容認するか否かの議論が起き、同人たちの間でも意見が二分したが、最終的には周桑の「問題はアブストレーだからどうということではなく、その作品自体が絵画として真に美しいか、美しくないかということで決定しなければならぬ」という主張で、落着したという。こうした彼の発言や信念を振り返りつつ、改めて作品を見渡すと、自然を捉えながら、どこか夢幻的な空間を造り出している周桑の作風であるが、それは決して感覚主義的なものではなく、揺るぎない描写と構成の力量の上に成立していることを実感できる。そこに、御舟の厳格で真摯な教えを継承し展開させた、高橋周桑という画家の本質が見て取れるであろう。

参考文献

・『高橋周桑展』図録　愛媛県立美術館分館　一九八四年
・「気骨の日本画家　高橋周桑の生涯」（1）～（6）『愛媛新聞』一九八四年四月二十一日～二十六日
・『速水御舟とその周辺　大正期日本画の俊英たち』図録　世田谷美術館　二〇一五年

愛媛県美術館所蔵・寄託 高橋周桑作品一覧（平成 30 年度末現在）

表１【所蔵作品】

	作品名	制作年	材質・形状	寸法(cm／縦×横)	出品歴	収蔵年度
No. 1	冬木立	昭和 5 年（1930）	紙本着色・額	65.0×50.0		昭和 59 年（1984）度寄贈
No. 2	鷺	昭和 15 年（1940）	絹本着色・額	38.5×49.5		昭和 52 年（1977）度寄贈
No. 3	新樹	昭和 25 年（1950）	紙本着色・額	50.0×57.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 4	春蘭	昭和 25 年（1950）	紙本着色・額	77.0×45.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 5	鮎	昭和 26 年（1951）	紙本着色・額	23.5×26.5	第 18 回新制作協会展	平成 29 年（2017）度寄贈
No. 6	柿	昭和 26 年（1951）	紙本着色・額	43.0×51.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 7	牡丹	昭和 27 年（1952）	紙本着色・額	59.0×49.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 8	山	昭和 29 年（1954）	紙本着色・額	108.0×147.0	第 18 回新制作協会展	平成 29 年（2017）度寄贈
No. 9	松と鳥	昭和 29 年（1954）	紙本着色・額	39.0×48.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 10	菖蒲	昭和 29 年（1954）	紙本着色・額	52.0×44.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 11	白木蓮	昭和 30 年（1955）	絹本着色・軸	43.0×49.5		昭和 48 年（1973）度寄贈
No. 12	富士と松原	昭和 30 年（1955）	紙本着色・額	50.0×42.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 13	鉄仙瓶	昭和 31 年（1956）	紙本着色・額	60.0×59.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 14	梅	昭和 32 年（1957）	紙本着色・額	136.0×112.0	第 21 回新制作協会展	平成 29 年（2017）度寄贈
No. 15	濠の月	昭和 36 年（1961）	紙本着色・額	60.0×86.4		昭和 59 年（1984）度寄贈
No. 16	雪木立	昭和 36 年（1961）	紙本着色・額	74.8×66.6		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 17	皿の杏	昭和 36 年（1961）	紙本着色・額	39.0×50.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 18	木立	昭和 37 年（1962）	紙本着色・額	60.0×50.0		平成 29 年（2017）度寄贈
No. 19	林	昭和 38 年（1963）	紙本着色・額	52.0×40.0	新制作協会日本画部春季展（1964 年　※ 遺作出品）	平成 29 年（2017）度寄贈
No. 20	春暁	昭和 38 年（1963）	紙本着色・額	44.0×51.0	新制作協会日本画部春季展（1964 年　※ 遺作出品）	平成 29 年（2017）度寄贈
No. 21	朝顔	昭和 30 年代	絹本着色・額	40.2×50.0		平成 6 年（1994）度購入

表２【寄託作品】

	作品名	制作年	材質・形状	寸法(cm／縦×横)	出品歴
No. 22	牡丹	昭和 11 年（1936）頃	絹本着色・軸	144.3×51.8	九皐会第 2 回展
No. 23	夕月	昭和 14 年（1939）	絹本着色・軸	129.3×41.6	
No. 24	竹林	昭和 17 年（1942）	紙本着色・軸	45.0×51.0	
No. 25	根菜	昭和 10-20 年代	絹本着色・軸	39.6×49.2	
No. 26	豆の花	昭和 10-20 年代	絹本着色・軸	52.2×51.0	
No. 27	松に鶴	昭和 27 年（1952）	絹本着色・軸	53.3×50.3	
No. 28	桜	昭和 29 年（1954）	紙本着色・額	69.5×72.5	
No. 29	松	昭和 29 年（1954）	紙本着色・額	111.0×143.5	第 18 回新制作協会展
No. 30	皿に葡萄	昭和 30 年（1955）	絹本着色・軸	44.8×50.4	
No. 31	皿に鯛	昭和 30 年（1955）	絹本着色・軸	39.3×54.5	
No. 32	牡丹	昭和 30 年（1955）	絹本着色・軸	50.9×56.3	
No. 33	鮎	昭和 30 年（1955）	紙本着色・軸	50.7×42.2	
No. 34	桃果	昭和 31 年（1956）	絹本着色・軸	39.3×49.9	
No. 35	松と桜	昭和 32 年（1957）	紙本着色・二曲屏風一隻	142.0×139.2	
No. 36	木蓮	昭和 33 年（1958）	絹本着色・軸	39.8×50.8	
No. 37	白菜	昭和 30 年代	紙本着色・額	42.7×51.0	
No. 38	水路	昭和 30 年代	紙本着色・額	67.8×67.8	
No. 39	旭光之図	昭和 30 年代	紙本着色・額	54.0×49.8	
No. 40	鉄仙蔓	昭和 30 年代	絹本着色・軸	52.6×51.1	
No. 41	春晨	昭和 30 年代	絹本着色・軸	51.2×57.0	
No. 42	三津富士	昭和 30 年代	絹本着色・軸	43.5×52.0	
No. 43	蘭花	昭和 30 年代	絹本着色・軸	60.4×59.0	
No. 44	曙	昭和 30 年代	絹本着色・軸	43.1×50.2	

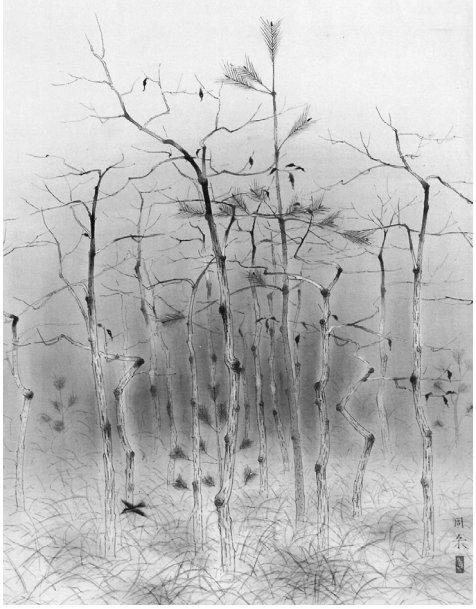

図１
雪木立
昭和５年（1930）

図２
牡丹
昭和11年（1936）頃

図３
夕月
昭和14年（1939）

図４
山
昭和29年（1954）

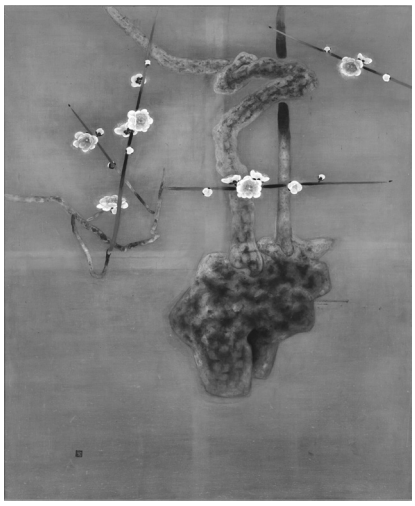

図５
梅
昭和32年（1957）

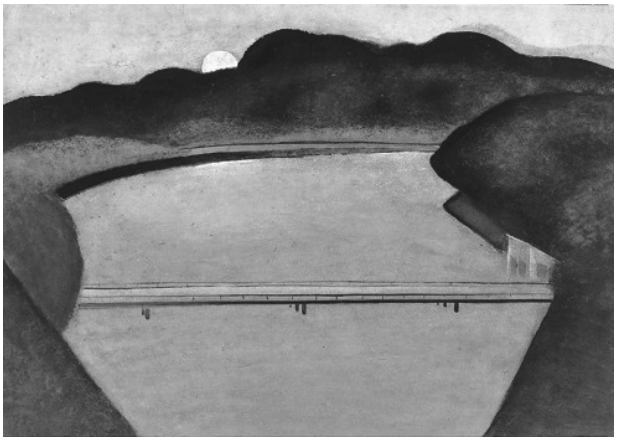

図６
濠の月
昭和36年（1961）